
罪滅ぼしの記憶 ~ offense destroy memory

龍&龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪滅ぼしの記憶 `offense destroy memory`

【Nコード】

N4270M

【作者名】

龍&龍

【あらすじ】

どこにでもいそうな平凡な高校生。

学校が終わり、祖母の家に行き自由学習をしていると・・・

最近始めたばかりの新人です。
まだよくわからないことがたくさんあるので、いろいろ教えてください。
さい。

文章の中に誤字があったら教えてくれるとありがたいです。
毎日最低1ページ書いていくのでよろしくお願いします。

第1章 ～ 始まりの扉

「ふああ〜」

俺こと《鳴滝 海斗》は眠い目を擦りながら、ベッドの上でボーっとしていた。

俺は高校2年 17歳 身長178cm 体重64kg 容姿、成績、運動神経は全て中の中。

特に好きな人もいないし、今まで付き合った人もいない。

どこにでもいそうな平凡な高校生だ。

「海斗〜早くしないと遅刻するよお〜」

今の時刻を確認してみると、短針が8を過ぎたあたり、長針が2のあたりだ。

起きたばかりなのか、頭が回転していない俺は、今の時刻を読むのに少し時間がかかった。

・・・数分後・・・

「姉貴！なんでもっと早く起こしてくれなかったの!？」

階段を急いで降りてしかめっ面で姉に問いかけた。

「だって、だって海斗が気持ちよさそうに寝てるから・・・グスツ。

ごめんなさい・・・。」

やってしまった・・・。」

俺の姉は、少しせめるだけで泣いてしまいうくらい泣き虫なのだ。でも機嫌を直す方法を知っているから大丈夫。

「雫〜ごめんね。俺が悪かったからさ。何でもしてあげるから、機嫌直してな？」

するとさっきまで表情が暗かったはずの姉が急に嬉しそうな顔にな

った。

「本当！？海斗大好きっ／＼／＼何でもしてくれるんだよねっ。エへへっ／＼／＼」
やりすぎたか。

今の現状は、姉貴が俺に抱きつき類にキスをしようとしている。

「おい！姉貴やめろっ／＼／＼ 学校遅れちまうよ・・・」
と言いながら、姉を振りほどき、学校の準備をして玄関に向かった。

「それではお姉様行って参ります。」 最高の笑顔で姉に言った。

・
・
「いつてらっしやーい！」

（姉貴は俺の演技をスルーしたのか・・・？ いや違うな姉貴がばかなだけか。笑）

俺は自転車に乗り学校へ向かった。

学校へ向かう途中だが、少し家族の紹介をしよう。

さっきも出てきたが、俺の姉は《鳴滝 雫》だ。

詳しく言つと、22歳 身長168cm

ルックスと成績は、学校でもトップを争うくらいすごいだろっ。

運動は苦手ならしく、全くできない・・・

性格の一部はしっかりしているので、家庭の仕事もなんなくこなす。

俺には親がいるが、今はいない。

親は、研究者でアメリカで住みながら何かの研究をしている。

俺も母も、父がなんの研究をしているのかは聞いたことがない。

自転車をこいでいる内に学校の門の前まで来たようだ。

遅刻にならない為に急いで教室に向かった。

教室の前に着いたところで、廊下から教室に先生がいないことを確

認して、教室に入った。

教室に入ると、みんなのキツイ視線がこちらに向けられている。俺はみんなの視線を無視して、静かに自分の席に座った・・・すると、ちょうど8時35分になったのか、チャイムが鳴り始めた。寝ようとする体勢になろうとしたが、先生が入ってきたので、寝るのをやめにした。

「今日は、1学期最終日なので、一時間目に通知表を返して、終わりにしたいと思います。」
とそれだけを言い残し、どこかへ行ってしまった。

俺は学校にいる時間が一番嫌いだ。
なぜなら、友達がいなかったから・・・
小学校のときは友達がいたが、今は喋るのが苦手で、友達ができたことがない。

今日学校が終われば、とても楽しくなる予定の夏休みに入る。
夏休みは、姉と祖母と家に行き、夏休みを過ごす。
退屈になった俺は寝ることにした・・・

「ああ~~~~・・・????」

あたりがとても静かなことをおかしく思い、回りを見渡してみた。

誰もいない・・・

全員帰ったのだろう。机の横にもロッカーの中にも、バックはひとつも入っていない。

(誰か起こしてくれてもいいじゃん。)と心の中で呟き、教室を後にして家に帰ることにした・・・

校舎から出てみると、空が燃えているように、赤に染まっていた。悲しい気持ちを抑えながら、自転車に乗って家へと走り始めた。

家について扉を開けたら、姉が仁王立ちで立っている!!!

仁王立ちをしている姉を無視して姉と壁の間から部屋へと戻ろうとしたが・・・!!!

「今日の朝n何でもしてくれるって言つたよね///?」

(まだ覚えていたか・・・まあ無視すればいいかな・・・)

こつちを見ている姉を無視して、ふたたび足を進めた。

「何で無視するのぉ・・・無視しないでよぉ・・・グスツ・・・」

「今日は疲れているから明日おばあちゃんの家でな。」

(少し冷たいこと言ったかな)・・・と思いながら階段を上がって行った。

部屋に入り、ベッドに横になっていると、鞆からはみ出ている通知表が目に入った。

通知表を広げると、オール3だった!!!

部屋の中で (俺すごくな?) とか言いながら喜んでいた。

明日はおばあちゃんが9時に来るから早めに寝るとしよう。

今まではボーっとしていた俺だったが、睡魔に襲われて眠りについた。

第1 - 2章 始まりの扉

「……………??？」

俺は目覚めた。腹の上に何かいる！！

腹の上にいるものを見るために、起き上がってみることにした。

すると……姉が俺の腹の上で寝ている……??？」

（なんで、俺の部屋にいるんだよ……）」

そーっと姉を動かして、二人分の朝食を作ることにした。

「今日の朝食は何にしようかな？ ……ベーコンエッグでいいか……」

一人で呟き、調理を開始した。

料理は、俺の得意分野だ。家庭科の成績もほとんどは調理でかせいでいる。

料理を作っているうちに、姉が階段から降りてきた。

「おはよお。海斗あと一時間しかないよ??？」

（はぁ？姉貴は何を言っているんだ？まだ6時なはずだけど……）
姉に言われたことを、半信半疑で時計をみると……
なんと八時になっている……

これは困った。なぜかと言うと、まだ祖母の家に行く準備をしていないのだ。

姉に「先に食べてて。」と言って、急いで部屋に戻った。

早く準備をしないと遅れてしまうので、準備をしようとしたら……
部屋には、俺の旅行用の鞆がきれいに部屋の真ん中に置いてある。

リビングに戻り、「ありがとう。」と照れくさく言って朝食を食べることにした。

二人で朝食を済まして、おばあちゃんがきたので、車に乗って移動を始めた。

・・・3時間後・・・

「やっとついたよ。ここに来るのも久しぶりだな。じゃあ、部屋に入って勉強でもするかな・・・。」

「海斗く少し外に遊びいこうよ？」
行く気になんてなれるわけがない。

何をされるかわからないからいきたくない。ただそれだけのことだ。

「海斗よ。昨日、部屋を片付けていたらな、古い書物があったからな、使ってもいいからの。」
おばあちゃんが教えてくれて、家へと入っていった。

部屋に着いてから、祖母に言っていた古い書物がある部屋へと足を進めた。

すると、そこには数え切れないほどの分厚い本がたくさん並んでいた。

本を読むことが好きな海斗は、一人嬉しがって、本の題名をざっと見て、興味をもったら読むことにした。

・・・1時間後・・・

なにか興味深い本が出てきた。

題名は『鳴・・・幸雄・・・日記』と書かれていた。

早速本を開いて読んでみると、

8月6日

今日、森の中で探検していたら怪しげな洞窟を発見した。

明日、昼間に洞窟に行ってみたいと思う。

8月7日

昨日言っていた、洞窟に入ってきた。

奥まで行ってみると、この世とは思えないほどきれいなところにたどりついた。

山の上にたどり着き、景色を見てみると、見たこともない家があつてびっくりした。

明日も、あの町に行つて色々研究したいと思う。

8月8日

俺は死ぬかもしれない……

今日町に下りてみたら、……とは思えない……いて、
剣を突きつけられ、必死に逃げてきた。

洞窟まで走つて逃げたが、……達も追つてきて

今……を探しているだろう……

もし……が最後なら……を見て……
……に行つて……
欲しい。

今扉が叩かれている。もう最後……

・・・さようなら・・・

なんだこの日記は？

書いた人は《鳴・幸雄》と書かれている。

苗字が似ていて怪しいと思った俺は、その部屋を飛び出して、祖母がいる部屋に向かった。

「ハアハア。おばあちゃんこの人のこと知ってる？」

さっき見た本を見せたら、おばあちゃんは難しい顔をした。

「もしかしてこれは・・・ わしの祖父だぞ。だいぶ昔の物だな。」

祖母は、この本のこと、この人物のことを詳しく丁寧に教えてくれた。

俺は心の中で、変な町？

いや、洞窟の先に行ってみたいと思っていた。

この本の最後のページに洞窟の位置なのだろうか、地図が書いてあって、一箇所には○の印が書いてある。

俺は行ってみたいという衝動に駆られて、地図を片手に家を飛び出した。

行ってみて着いた場所は、森の中になっていた。

もう辺りは暗いため、視界が悪くなっていた。

すると、近くに大きな洞窟があるのが見えた。

俺は走って、洞窟の目の前まで来てびっくりしていた。

心の中で、さっきの日記のことが脳裏に浮かび、少し考えて入ることを決意した。

洞窟の方へ歩き始めた。

もう三分は歩いただろうか？

全然先が見えない。

歩きながら （俺は今日でしんじょうのかな）とか色々考えていた。

もう少し歩いていると、洞窟の先から、光が差し込んできた。

今は夜なはずなのに、光が見えるのはおかしいと一瞬思ったが、走り始めていた。

すると・・・

なんとそこは、夜なはずだが、昼間なおかしいところに出てきた。山の頂上で、町が見えていた。

岩にかかっていた、黒いマントを取って怪しい格好をしながらも、山を下って行った。

下って行ったら、家が一軒見えてきた。

その家へ行つて、ここがどこか聞こうとしたら・・・

「こっちに何かいるぞ！！早く来い！」

誰かが叫んでいる声がした。

こっちに向かっていることを確認すると、俺は逃げる為に走り始め

た。

「標的がにげたぞ！早くしろ！」
俺を追っかけてくるのか。

やっぱり来ないほうがよかったな。

俺の人生はどこかもわからない場所で終わるのか。

だが、ここで死んだら今までの人生が水の泡になると思った馬鹿な海斗は必死に生きようと考えた。

今は、必死に走ることを考え、追ってくる奴らがまだ追ってきているのか、後ろを見てみた。

そしたら・・・

もう追ってきていなかった。

木の陰で隠れようとして、大きな木が見えて、道を曲がったら・・・
「きゃああ！！！」

女の人が叫び声をあげて、女の人と頭がぶつかった。

俺はどんどん意識が薄くなってきた、

「君！大丈夫？ねえ。・・・夫？・・・」

ついには意識を失った・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4270m/>

罪滅ぼしの記憶 ~ offense destroy memory

2011年10月7日13時23分発行